
神様のおもちゃ箱

仁科治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のおもちや箱

【Nコード】

N2206L

【作者名】

仁科治

【あらすじ】

焼き芋は、よろよると走る僕からどんどん離れていった。なかなかつかまらなくて、僕は泣いていた。

?-12 焼き芋は坂道を転がっていった

?-12 焼き芋は坂道を転がっていった

最初の手紙はずいぶん長かった。この「僕」という男は自分の生い立ちを書いているらしい。しかし、なんで私に書いてよこすのだろうか。

> 最初の手紙2<

一年生になつたばかりの僕は、ランドセルを背負い、だらだらと続く長い坂道を上るのがやっとだった。体がぐらぐらして、とても歩きにくかった。

上履きの袋を手を下げていた。それが足を踏み出すことに、振り子のように揺れた。身体が傾いてバランスが崩れた。

上り坂は通い始めたところから、僕にはかなりな勾配を感じさせていた。

坂の途中に母がいた。母に気づいたのも手が届く近さに来てからだったし、声をかけられなければ素通りしていただろう。

母は新聞紙の包みを僕に渡して、家に帰って食べるといった。僕は、包みを両手に抱えるように受け取った。

中には焼き芋が入っていた。焦げたにおいが顔をおおったが、手で持てない熱さではなかった。

僕に手渡すと、母は坂道を下っていった。僕のほうを振り返らず、走る感じの早さで歩いていった。

丸い背が離れていくのを見ると、だれかが包みに手を掛けて引っ張って逃げた。クラスで僕にいつも嫌がらせをする奴だった。

焼き芋がいくつか落ちて、坂道を転がっていった。

拾おうと追いかけた。焼き芋は、よろよると走る僕からどんどん離れていった。なかなかつかまらなくて、僕は泣いていた。

僕は、母の歩いていった先を見た。母の姿はなかった。

また僕は、焼き芋を追いかけた。涙で前が見えなくなっていた。その日から、母の記憶がなくなった。

祖母は、母のことを語らなかつた。

母がいなくなった夜、祖父は僕を前に座らせ、母が訪ねてきても絶対に会うなと話した。夕食前にすでに酒量が過ぎていたらしく、祖父は酔っていた。

酒に酔うと、祖父はくどくなった。同じことを繰り返した。

その夜、僕はちゃぶ台の前に正座していた。半ズボンの膝が畳で痛んでいたが、その姿勢を取っていると、祖父の話が短くなったからだ。祖母は夕食の用意で台所にいた。

僕は祖父の前に並んでいるおかずが気になっていた。腹が空いていた。祖父が使う箸先が生き物のように動いていた。

そのうち、夜のぼんやりした明かりの中に漂っているような感じになった。僕自身が僕から離れて、天井の上から自分を見ていた。祖父がこのあと何を話したのか、周囲にだれがいたのか覚えていない。食器のこすれ合う固い音が耳の底で響いていた。

しばらくして、東京のT区から隣のY市の外れに越した。

祖父の仕事の関係だった。隣の市に小さな工場と事務所を構え、造船関係の下請け仕事をしていた。

それから数年は、僕は自分のことだけの記憶しかないし、それも毎日何をしていったのかはつきりしない。

母の話が祖父の口から出たのは、僕が小学校四年になったころだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2206/>

神様のおもちゃ箱

2010年12月29日22時03分発行